

# ロストファイア

雲鳴遊乃実

母を失ったのは10年前、木枯らしの吹く季節のことだった。

昼間のうちに母から頼まれて庭にしきりに降り積もる落ち葉を塀の傍へと集めた。掃き始めたときは寒かったけれど、小さな枯れ葉が徐々に山になってくるのが面白くて、長い時間はしゃぎながら続けていた。私と同じ程度の背丈の山が二、三できたところで、もうそろそろいいよと母に声を掛けられた。

私はふと、山を一か所に集めようと思い立った。その方が山が大きくなって面白いと思ったからだ。掃除用具入れから大きいプラスチックの塵取りを持ってくると、落ち葉の山の下に押し込み、塀の近くの一か所に滑らせていった。やがて出来やがった山はまるで登れそうなくらい大きいものだった。私は満足して、母の再びの呼び声に答えて屋内へと戻っていった。

日が暮れる頃になって事件が起きた。

庭を見ていた母が叫び声を上げた。庭に突然大きくうねる炎の柱が現れたのだ。

後に消防団の捜査によって放火の痕跡が発見され、犯人も翌日の午後には逮捕された。僕には全く見覚えのない人だった。母がその人を知っていたかどうかはわからない。母はその日亡くなってしまった。私を外へ逃がしてから必要なものを取ってこようとした際に、突風で肥大化した炎が彼女の身体を呑み込み、骨も残らぬほどに砕いてしまったのである。

私が茫然としているうちに、私の家はどんどん燃え崩れた。消防隊が駆け付けたときにはもう建っているのもやつの様子だった。

このときの消防隊は正式に認められたばかりの画期的な消火活動を行った。

熱量を質量へと変換する技術、というのが、大方の識者による一般人向けのごく簡単な説明で用いられる言葉だった。

消防隊の4トントラックに載せられた大がかりな装置が、合図とともに私の家に物々しい青の光線を浴びせた。炎の赤い光とぶつかりあい、あたり一面が白く輝くと、うねり狂っていた炎の動きが完全に静止し、石のような物質へと結晶化した。熱はもうなく、他の家屋へ燃え広がる心配もなくなった。

家族を失ってからしばらくの間、私は政府の所持する医療施設に保護された。私は健康だと実感していたのだが、火事を間近で見っていたせいもあって心肺組織を何度も検査された。

事故現場を見に行ったのは施設に入ってから三日後、外出許可が下りてすぐのことだ。結晶は私の家のあった場所で、赤く角ばった塊が日の光を散らしながら佇んでいた。家の燃え残りもあったのだろうが、すでに撤去されていて、火の結晶だけが放置されていた。最終的な処分場をどこにするかで揉めていたらしかった。

消防隊の一人が私の傍にいてくれた。私の心労を案じてついていてくれたのだ。私としても、自分の家族を奪った炎を相手にするには不安があった。

結晶にもそのとき初めて触れた。熱はもう感じられず、冷え冷えとした金属質の石の手触りがあった。経緯を考えずにいれば、宝石のようにきれいだとさえ思える。

消防隊員は結晶に手を振れると、出っ張っていた一部をつまみ、そっと折った。小気味のいい音が響いて、火の結晶の破片ができた。

「ほしいか」

消防隊員に尋ねられ、私は素直に頷いた。

手に渡されたそれは固く、冷たく、輝いていた。あまりにも普通に触れるものだから、こんなもののせいで母が死んだなど到底信じられなかった。

やがて体調を回復した私は父に手を引かれて別の地へと引っ越した。事故現場からは遠ざかったが、私の心にはあのときの猛火の煌めきと母を失ったという事実が澱になっていた。

それ以来、私は火の悪夢を見るようになった。猛火に焼かれる我が家が見え、母親の叫び声が響く夢だ。夜中だというのに汗塗れで目が覚めてしまう。その度に自分が母を火で亡くしたことを実感した。火は消えることなく、私の心の中で忌々しくも燃え続けていた。

母を欠いた状態でも、新しい生活は始まった。

状況に順応するのは父の方が早かった。彼は結局母の葬式で休んだきりで、それが終わるとすぐに会社勤めを再開した。私と分担していた家事も愚痴を垂れずに続け、私よりずっと効率よく取り組んでいた。葬式の日からそう長く時をおかないうちに私の知らない女の人を家に連れてきた。結婚を前提に付き合っている、と真面目な顔で私に打ち明けられたとき、私は父の中から母が消えてしまったことを悟った。

新しい母親は決して悪い人ではなかった。私のことを気遣ってくれていることは見ていてよくわかった。父に見せる微笑みや仕草から、彼女が父のことを本当に愛していることもそこはかたなく伝わった。だから嫌いたくはなかったのだけれども、彼女は私の母ではなかった。どうしようもないことながら、違和感が拭いきれなかった。だから学校を卒業すると同時に上京して、父たちとは疎遠になった。

私の成長と共に、火の結晶化の技術も急速に世に広まっていった。火が燃え広がらずに固まってくれば、事故も防げるし、自分の過ちで大事になるのも防ぐことができる。多くの人がその恩恵に与ろうとした。技術の許可制度が敷かれると、専業として扱う民間の業者が現れた。

私も火の決勝化を扱う民間業者に就職した。

最初に営業課を経験した。そこでは小型の結晶化装置の売り込みを主に行い、火災予防の一般への広まりを実感した。次の部署である庶務課に席を置いたときには、いよいよもって住宅街から火災がすっかりおこらなくなっていた。

\*

ある日、私は水月という女と出会った。フリーのライターであるらしく、火の結晶化についての現状の雑感と展望をインタビューをしたいと窓口に寄ったのだという。特別目だった訪問者ではなかった。火の結晶化が話題になるにつれ、似たような依頼は増えつつあり、そのたびに庶務課の誰かしらに対応する決まりになっていた。私は彼女への対応にあたることになった。

約束の期日に初めて水月の姿を見た。30に差し掛かる私より幾らか若い。長い髪は清潔そう

に艶めいている。全体的に活力ある印象だったが、しかしその目には不似合いな翳りが微かにあった。

応接室でのインタビューはよどみなく始められた。

「おかげさまで、火事の延焼件数は減少し続けています。直近六か月では皆無です。正確な情報収集と適切な技術者派遣システムの構築、及び維持管理によって、このような目に見える成果が出ているのですよ。火事に怯える時代は終わりに向かいつつあるのです」

それを締め言葉にして、火の結晶化技術についての説明を終えた。上司に指導された通りの大々的なアピールだったが、水月の反応は曖昧だった。力を込めすぎただろうかとぼつの悪い気分になり、無理やり咳払いをして切り替えた。

「失礼。火の結晶化の有用性については十分におわかりいただけましたか」

「ええ。とつても」

水月が小さな笑みを浮かべ、メモ帳を顔の前まで持ち上げた。

「それで、今後は一般家庭ばかりではなく、災害現場や戦場にも同様の技術を応用する予定であるのですね。今後の展望が期待される素晴らしい技術であることはとてもよくわかりました」

水月はそう礼を言い、頭を下げ、すぐに次の質問へと移った。

「ところで、結晶化した火はどちらへ運ばれるのでしょうか」

話の筋は変わったが、答えられない内容ではなかった。

「我が社と提携している業者の保有する特別な処分場に運ばれ、一時的に保管されたのち、焼却処分されます」

「燃えるんですか」

「ええ。可燃性です。もちろん結晶化の際にある程度熱量が逃げていますし、保管時にも冷却処理がされるので、勢いは元々の火よりもかなり抑えられています。焼却は延焼の恐れがなく、鎮火装置も十全に配備された密室で行われますので、安全も配慮されていますよ」

「燃え残ってしまうことはありませんか」

「あります。ただ、そうした場合は断熱性の釜に詰め込んで地下深くに貯蔵されます。きちんと処理がされている結晶は十年も保管すればほとんどのエネルギーが朽ちて燃えなくなるので、そのまま土の中に廃棄することができるんですよ」

私が話している最中、水月はメモ帳にすらすらと文字を書き加えて言った。

ふと、水月のペンが止まった。言葉を発しなかったが、目が若干大きく開かれていた。しばらく待っていたが、不審に思って私から声をかけた。

「どうかしましたか」

「あ、いいえ」

水月は顔を上げ、首を振った。「すみません。考え事をしてしまって」

「私の説明に不満がありましたか」

不安を感じながら、私は問いかけた。もしも問題ある発言をしてしまっていたらすぐにでも訂正しなければならないと思った。

「いえ、不満なんてとんでもない。とてもいい記事が書けそうですよ」

水月はメモを指して微笑みを浮かべた。しかし、どこかぎこちない。先ほどまでの笑みと比べると、今の笑みは無理やり顔に貼りつけたもののようには思えた。

営業で培った勘が、彼女は何かを躊躇っていると訴え、急ぎ立ててきた。直接売り上げに影響はしないだろうが、来客対応とはいってももしも気になっていることがあるのならば真面目に応えてあげた方がいい。そう思い、私は水月へと身を乗り出した。

「もしもまだ質問があるようでしたら、何なりとご相談ください。記事に関することでも、そうでなくても結構です。答えられる範囲でなら何でも答えますので」

水月の視線が私に注がれた。ぎこちない微笑みが消えていき、真剣な顔つきが現れてくる。私は勘の正しさを感じながら彼女の言葉を待った。水月の口が躊躇いがちに開かれた。

「これは、仕事とは関係ないことなので、無理でしたら答えていただかなくて結構です」

水月はそう念を押してから言葉を続けた。

「もしも可能でしたら、一か月前の事故の火を私に見せてくださらないでしょうか」

その日の夜、私は同期の友人と約束してからバーに入り、事の次第を説明した。

「どうしてそんな火を見たがっているんだ」

彼の所属する技術部は、社の中でも火の結晶を直に扱っており、友人自身にも技術畑の出身で結晶化の知識に明るかった。しかし、私の話を一通り聞き終えた彼の顔は見るからに渋っていた。

「その女はあの火災と関係があるのか」

一か月前の夜、街中でビル火災が起きた。久しぶりの大がかりな消火活動が進められたが、旧式のビルでは設備の至らない部分も多く、逃げ遅れてしまった人が数名いた。

「なんでも、水月の恋人がその被害者のひとりだったらしいんだ。以来忘れようとしたが、どうしてもその火のことが気になっていたらしい」

私は水月から聞いた話を素直に説明した。もっとも動機としては曖昧だと思っている。友人の顔の疑問の色も消えなかった。

「もちろん、火の結晶自体はすぐに手に入るだろう。この近辺での火災は一か月前のその火を最後に今まで起きていないんだ。燃焼炉に行けば微弱な燃えカスくらい見つかるだろう。拾ってこること自体は簡単だ」

「そうなのか。もう時間が経つから、てっきりもう手に入らないものかと思っていた」

「小さい火の結晶なんてのはそのうち勝手に空気に溶けちまうから、案外ほったらかしにしてあるんだよ。邪魔になったときは空気に触れないようにすればいい。そうすればすぐ消えてくれるしな」

「じゃあ、水月の要望にも応えられるんだな」

自然と私の声が高くなる。ところが、友人の顔はなおも冴えなかった。

「二つ、言っておきたい。まず、火が外に運び出されて再燃されたことが発覚すると大問題になる。これは忘れちゃいけない。微弱であろうと火なのだから、燃えやすいものへ簡単に伝播し

ちまう。いくら予防策を講じても予想外の被害は起こりうる。その原因がお前の判断だとわかれば、会社にはいられないだろうよ。

そしてもう一つ。その女が何を考えているのか気を付けないといけない。もしかしたら、ただ火を見ただけではないかもしれない」

友人の二本の指が私に突きつけられる。どうして、と私は質問を重ねた。

「あくまで可能性の話だが、そいつはその火で死ぬ気なんじゃないか」

不穏な言葉を投げかけられて、私は息をのんでしまった。

「死ぬって、恋人を燃やした火の中に飛び込むっていうのか」

「その女が相手の死を悼み過ぎていたならば、ありうるだろう。もうこの世に未練なんてない。いっそあの人を殺したのと同じ火の中で死んでやるってな具合だよ」

友人がもっともらしく説明する。私は最初こそ首を振ったが、完全に否定できないことに気づいて何も言えなくなった。

何よりも、インタビューの際の彼女の憂いを帯びた瞳が目に浮かんだ。あの瞳の持ち主である彼女は死を願っているのだろうか。その想像は、彼女の表情も相まって妙に様になっているように思えた。

「で、どうするんだ。結晶は取ってきてほしいのか」

そう言って、友人はウイスキーを飲みこんだ。中身があっという間に半減する。電灯の淡い光を乱反射するそれを私はぼんやり眺めていた。

「少し待ってくれ。考えを整理したいんだ」

私はようやく自分の頼んだカクテルに口をつけた。トマトの香りを漂わせる赤いカクテル。口に含むと、舌がざらつき、味がしばらく消えなかった。

帰宅してから、私は自分の過去を振り返った。

火を結晶化する仕事に就いたのは、火が怖かったからだ。母の命を奪った火というものを無力化し、この世から消してしまえる。そんな仕事に従事するのは私にはうってつけのように思えたのだ。

水月も火を怖れているのだろうか。それならば、火がどのような形で結晶化されているのかを知るときっと火への恐れなくなるだろう。そうすれば火を気にすることもなくなるだろう。

見せるべきだ。そう思い、床に入った。

その夜またあの日の夢を見た。猛火に我が家が焼かれる夢。もはや私にとってはおなじみとなっていた悪夢だ。いつまで私の心を燃やし続けるというのだろうか。幻影の熱に怯え惑いながら、汗みずくで目が覚めた。

まだ消えていないのか。苛立つ私の頬を汗が幾筋も流れ落ちていた。

\*

結晶を手に入れるのは拍子抜けするほど簡単だった。

仕事を装って友人を誘い、一緒に炉の中へ入らせてもらったら、すぐに床に転がるたくさんの燃えカスを見つけることができた。大きさは手のひらどころか指先に載せる程度でしかない。それでも、赤く不安定な輝きを放つそれは火の結晶に間違いなかった。

燃やさないことと、持ち出したと大っぴらに言わないことを友人に忠告されたが、聞き流してしまった。心の中はまだ高揚していた。久しぶりに見る火の結晶をみつめ、それが結晶となったときのことを思い浮かべていた。今からこれをつかって火をもやし、消し去る。そう思うだけでも気分が良かった。

事前に水月と約束したのは、堤防沿いのテラスだ。歩いて数分の場所に高架下の河原がある。風が吹き降ろすため煙が空に紛れやすく、万が一火が大きくなってもすぐに消化できる場所だとしてそこを選んだのである。

水月はテラスのベンチに腰かけていた。私が近寄ると立ち上がって会釈をしてくれた。河原へと移動してから、火の結晶を取り出した。

「お待たせしました。これがその火です」

私が手に載せたそれを彼女はまじまじと見つめた。目を見開き、真っ直ぐな視線を結晶に注いでいた。吹けば飛んでしまうような小さい結晶だが、彼女は一瞬でもそれを見逃したくない様子だった。

「こんなに小さくても燃えるものなのでしょうか」

彼女が私を一瞥する。

「ええ。まだ焼却しきれていない結晶ですので、ライターで炙ればすぐに燃えますよ」

私はしゃがんで、平たい石の上に結晶を置いた。

彼女の視線が向けられるのを感じながら、河原の石で結晶を抑えつけた。

「いいですか。おそらくあまり長くは燃えていられません。大きさもごく小さいでしょう。もしも見たいのであれば、見逃さないように気を付けてください」

水月が頷くのを見て、私も頷いて返した。了解の意図は汲み取った。

ライターを取り出し、着火して、火の結晶に近付けた。数秒後に小さな火花が散ったのを見て、両手をすぐに引いて、結晶を自由にした。結晶はみるみる赤くなり、震えて、周りにたくさんの火花を散らした。

やがて、結晶の突端に火が灯った。ちょうど蠟燭の先端につくような、上に伸びた小さな炎だった。

これがこの結晶の炎なのだろう。小さな火はどう見ても特別なものではなく、他の火と同じようなものだ。彼女の期待に添えたのだろうかど不安になるほど頼りない。

彼女の顔を覗いてみると、目を見開いて火を睨みつけていた。真剣そのものといった表情で、私の視線にもまるで気づいていないようだった。

死ぬ気かもしれない、そう警告した友の言葉を思い出し、寒気がした。

まさかこの小さな火で死ぬとは思えないが、念を入れた方がいいかもしれない。そう思って、私は持参した小型の消火装置を取り出そうとした。

そこへ、彼女の言葉が降ってきた。

「これが、あの火なのですね」

誰に向けた言葉とも思えなかった。彼女自身が自分に言い聞かせているようだった。

彼女の目の端が光ったかと思うと、その頬を一筋の涙が通っていった。

泣いている。

恋人のことを吊っているのだろうか。でも、その口元には不思議な、満ち足りたような笑みが差し込んでくる。

いったいどうしたのだろう。

困惑する私には目もくれず、彼女は立ち上がった。胸に手を当てて、目を閉じている。

「ずっと実感が持てなかったんです。あの人が死んだなんて、未だに信じられなくて。待っていればそのうちまたいつか家の玄関を叩いてくれるんじゃないかって思ってしまったんです」

彼女は言葉を切り、目を開いた。それまで奥の方でちらついていた憂いが消え、夕日を受けて光が灯っている。

「でも、その火を見てわかりました。あの人はそれで死んだのですね。あの人は確かにその火に焼かれて死んだのですね」

一気に独白した後、彼女は一呼吸置いてから付け加えた。

「もう、待っていなくていいのですね」

それ以上何も言わなかった。彼女も、私も、静かに炎を見つめていた。

火は5分と経たず消えた。煙もほとんどたっていない。河原のそばを歩く人の誰からも見られなかっただろう。

「今日はありがとうございました」

彼女が爽やかに頭を下げた。もう悩みはないのだと、その表情は語っていた。

\*

その夜、私は倉庫からカンテラを引っ張り出した。もう何年も使っていなかったので埃を被ってしまっていたのを拭いて、テーブルの上に置いた。台座部分は無傷で破損もなかった。

それから火の結晶を取り出した。昼間に持ち出したあの住宅火災の結晶よりも大きく、古いそれは、私の家族の命を奪ったあの炎の結晶だ。

10年前、あの消防隊員からもらいうけたまま、処分することもできずに倉庫に仕舞い込まれていたのを取り出したのである。間近で見たのは初めてかもしれなかった。私はずっとその結晶を怖れていた。触れてはいけない忌避すべき炎だと思っていた。

それを取り出したのは、水月のことを考えたからだ。彼女は火を見たがり、着火し、そして納得した。大切な人を奪った火を受け入れ、その人の死を認識した。一連の彼女の行いが、妙に眩しく心に残った。

もちろん、私は母が死んでしまったことを自覚している。母が私の家の玄関を叩くことはない。それについて悩み嘆く日はとうの昔に過ぎ去ってしまっていた。

だけど、あの火を見たいと思った。ふとした思い付きが衝動となり、私を倉庫へと向かわせ、



カンテラと結晶を取り出させた。

カンテラの台座に結晶を置いた。不恰好に尖っていて、押せばすぐにでも転がり落ちてしまいそうだった。

ライターを取り出し、尖がりの先端を炙った。火花が散り、小さな炎が灯った。何の処理もされていないせいか、屋間の結晶よりもすぐに点いた。

無事に着火が終わり、私は椅子に腰かけてそれを眺めた。小さな火は上へと細く伸び、カンテラの周囲を明るく照らしている。明かりを消してみたら、カンテラの周りだけが橙色に浮かびあがった。

火は危険なエネルギーだ。生身で触れれば焼け爛れる。ひとつの火が燃え移り、家々を焼き尽くすこともある。

しかし、はるか昔、火は救いだっただ。人間の祖先が火を発明したから、ものが燃やせるようになり、獣が逃げるようになり、夜でも活動できるようになった。火は人間の道具として身近に存在していた。それが今、無理やり熱を奪われ固められてしまうというのは、火にとってみれば悲しいことなのかもしれない。

万物は流転する、と古代の哲学者は言った。彼は万物の大元を火と規定した。火が冷たく固いのであれば、もはや万物の源とはいえないだろう。人間は火を殺せるようになってしまったのだ。

炎が揺れた。風は無いのだが、放出されるエネルギーにむらがあるようだ。少しずつではあるが、次第に大きくなっている。

目の前にある炎が、私を独りにした炎だ。改めてそれを認識する。

火に焼かれれば人は死ぬ。火から生ずる煙で窒息死する。武器の使用後には火炎が舞い、戦争の大火が国をも消し去る。火は環境を一変させる力を持っていて、大勢の人が火に苦しめられてきた。

私が生きていたのは偶然にすぎない。

そうはわかっているながらも、心に蟠りがあった。後悔が、ずっと残っていた。

あのとき、枯れ葉を塀の傍に集めたのは私だ。

もしも別の場所に集めていれば、放火犯の投げた火種に引っかけからず、火柱となることもなかったかもしれない。

もちろん馬鹿げた妄想であることはわかっている。私がそんなことを口走れば、私の父を含めた周りの人たちはこぞって私を慰めた。

お前は悪くない、悪いのは煙草を捨てた人だ、そいつはもう獄中で自殺した、だからお前は悪くない、もう忘れるんだ、悪くない。

何度も何度も同じことを聞いた。

でも、自分を責める気持ちは消え去らなかった。その代りに火を消し続けた。結果、後悔を抱きながら、それを思い出さないように無理やり押し込めてきた。だから私は悪夢を見続けていたのだろう。

火がまた揺れる。大きさがまた増した。カンテラの上蓋にまで届いている。

もしも火を燃やしているのが見つければ、消防隊が飛んできてこの火を結晶とするだろう。私を燃やそうとした火として、半永久的に消えない石となり、そのうち焼かれて土に還る。

止めてほしくないと思った。火にはいつまでも燃えてほしかった。たとえ天井に燃え移り、この家が猛火に焼かれようと構わなかった。

私は火を見つめる。カンテラを押し倒したい衝動を、寸でのところで堪えている。が、いつまで続くかわからない。友人の警句をふと思い出し、自嘲した。

ますます勢いが強くなる。カンテラの上部はすでに火で囲まれた。背丈が伸び続けている。やがては天井まで届くかもしれない。

それは私の犯した罪だ。

誰にも邪魔されることなく、私の罪が私の前で赫赫と燃えている。